



「大人が鑑、子どもは鏡」

園長 本多 郁代

先日、新聞に目を通していたら、日報抄に次のようなことが書かれていました。

小学生だった息子に手作りの笹団子をねだられたという。作れないと答えると「お母さんは日頃言っている。調べたり人に尋ねたりもしないでできないと言うのは、初めからやる気がないからだ。」と返された。(中略) 冒頭の女性は息子の「見事な返し」を受けた後、笹団子の作り方を1から学んでマスターしたという。言い訳もごまかしもしなかったその姿勢を、お手本にさせていただく。

子どもの純粋な眼とその見事な返しに「なるほど」と、感心すると同時に、一人の大人として、子どもと接する時の振る舞いについて考えさせられた瞬間でした。そして頭に浮かんだのが……

アノネ 親は子供をみているつもりだけれど
子供はその親をみているんだな
親よりもきれいなよごれない眼でね

(みつを)

「親」を「教師」と置き換えて読むと、さらに気持ちが引き締まります。幼稚園における

教師の存在は大きく、教師そのものが子どもたちに最も大きな影響を与える環境の一つだからです。

園では、保護者の皆様に安心して子どもたちを預けていただけるように、職員間での振り返りを生かし、教職員が同じ方向で保育を行っています。例えば、「たたいた」「たたかれた」の

言い合いの場面では、教師は互いの気持ちを聞き、受け止めた上で、たたくという行為についてよくないことを知らせ、「ごめんね」という魔法の言葉をつかって子ども同士が仲直りをするように導いています。大人が公平に接している姿を見せることはとても大切です。また、二人で楽しく遊んでいる所に別のお友達が入ってきた時には、受け取り方によっては邪魔をされたと感じる子どももいます。教師はそうした場面を見逃さず、両者の感じ方を伝え、相手の気持ちを推し量れるように促すと同時に、「いれて」という魔法の言葉も伝えます。大人が広い心で両者の気持ちを認める姿を見せることも大切です。

「きれいなよごれない眼」を保つために、私たち教職員は日々「鑑」となれるよう、これからも努めてまいります。

